

組合士 アラカルト

花巻機械金属工業団地協同組合 専務理事

似内 裕司にたない ゆうじさん

組合運営の秘訣は、「よいとん」プロジェクトと「先手を打つ目配り」

組合員とよいとん付き合って30年

花巻機械金属工業団地の入居企業は12社で、おなじみのコンピュータ・複写機・オーディオ・自動車などに組み込まれたる部品の製造はもちろん、新製品開発のための部品の設計、試作、そして量産、組立、さらに資源を生かすための回収など分野も多岐に及んでいる。

この団地を訪れるとまっさきに気がつくのが、各社の敷地・建物の間に垣根などの「しきり」が一切存在しないことだ。最近でこそ、このような工場団地も珍しくないが、同団地が設立されたのは昭和55年。当時としては「革新的」な団地コンセプトだったのである。

似内裕司同組合専務理事は、この団地の造成と入居予定企業による協同組合設立へ向けての動きが始まった昭和54年に、組合事務局の一職員として弱冠23才で入職した。高度化資金を利用して設立された団地、組合員企業の経営者たちはみな40代の働き盛りで、「仲間」に迷惑をかけられない。ともに会社の成長のためにがんばってほしい」と仲間意識が非常に強かった。そういう組合員経営者たちに囲まれながら、時に先輩として励まされた

り、時に経営者としての悩みに組合職員として相談に乗ったりと、「とことんままでの付き合い」を重ねていったという。

組合員さんとは昔も今も「飲み」にケーション」が盛んだそうだが、「そういう付き合いは、組合員と事務局のコミュニケーション」を非常に密接なものにしていく」と似内さんは自負している。団地の一角に建つ組合会館1階の事務局は、「今も昔も、組合員のサロン」だそうで、社長たちが三々五々、集まってお茶を飲み、互いの状況を話し合ったり、ちょっとした悩みや相談事を似内さんのところに持ち込んだりということ。「日常茶飯事」のことだという。

密接な付き合いは、経営者間だけに留まらない。やはり高度化資金等を利用して行った協業化設備事業では、資金的にも技術的にも1社単位では導入の難しい高精度加工機や最新鋭加工機を組合所有で導入。これらの機械をどう使いこなすか、各社の加工技術を高めていくかについてあれこれと知恵を出し合う中で、組合員各社の後継者や従業員たちの間にも自然と交流が生まれ、会社や組織という枠を超えたつながりが生まれてきているのである。

30周年を一つの節目に

このように有形無形のつながりを軸にして続いてきた組合は、今年の12月で30周年を迎える。ほぼ時を同じくして高度化資金の償還も終了する。組合の結束を強固にしてきた大きな要因の一つは、言うまでもなく、組合員間、事務局のつながり、互いに助け合うという仲間意識である。同時に、高度化資金の借入もまた、組合結束の大きな要因の一つであったことも事実である。この要因がなくなることは、「組合にとっても大きな転換点、節目になると受け止めている」と似内さんは言う。

そのような中で、「これからの組合をどうするのか」について、今、似内さんは事務局として「組合理事さんたちに、新しい目的を創ってほしい」とお願いし、働きかけているところである。

特に、これからの10年、20年を担う後継者世代によく考えてほしいと願っているという。そして、「次の方向性がどのようなに打ち出されても対応できるように、今から準備していくことが事務局の役目」と、あらゆる先手を読むことに力を入れていく。

組合士は実績を積み重ねてこそ

似内さんは、入職3年目に岩手県中小企業団体中央会に進められて組合検定試験を受験、組合士10期生として登録したベテラン組合士であり、「はじめは組合の右も左もわからなかったけれど、市役所や県中央会、商工会議所にいる教員や先輩から、高度化事業に取り組みで勉強と経験を積み重ねていった」と振り返る。そこから、「組合士の勉強は、自分が参加、実践してこそ身に付くもの」だと位置づけている。その姿勢は、会長を務める岩手県組合士会や組合士協会東北ブロックの勉強会にも反映されており、たとえば資格取得2年目の各県代表7人をパネリストに「組合士を取得した理由は？」など、参加者に共通し、かつ、関心の高いテーマを用意しては、活発な議論を展開させている。

では、組合士の魅力をどう伝えるのか。「これは、実績を上げていくしかない。組合士はわかりにくいとは言っていない。組合士一人ひとりがスキルアップを続けることで、周りにもいつか認められると信じています」。淡々としかし熱い口調で答えが返ってきた。

